

## 北海道の詩人・小熊秀雄の短歌について

中村 香菜子

小熊秀雄は北海道出身の文化人である。小熊は1901（明治34）年に小樽で生まれ、幼少期を主に樺太で過ごし、その後旭川に移り、1940（昭和15）年に東京で没した。小熊は、39歳と短い生涯の中で、詩、小説、評論、絵画、童話、短歌と幅広いジャンルの作品を著した。その中でも小熊は、北海道ゆかりの「詩人」として知られており、詩に関する文献は多く存在する。しかし一方で短歌についての文献は少なく、研究があまりされてないと考えられる。本研究では、小熊の短歌を分析し、彼の短歌の特徴や傾向を明らかにすることを目的とする。さらに、詩と短歌で特徴や傾向の違いがあるのか、考察する。

小熊の短歌は『新版小熊秀雄全集』（1990、1991年）から収集し、五・七・五・七・七に分けて、平仮名でエクセル2007に入力した。そして、入力した短歌の中で、表現技法はどれほど使われているのか、どのような言葉を多く使ったかなどを調査し、短歌の特徴や傾向を分析する。一方で、小熊についての参考文献を踏まえ、彼の詩の特徴や傾向をまとめた。そして、短歌と詩の間に特徴や傾向の違いがあるかを比較し、なぜそのような違いが生まれたのか、そして小熊にとっての短歌の位置づけを考察していった。

その結果、先行文献では小熊の詩が、形式、内容、年代の全ての面において、根源に民衆（人）への愛が存在し、叙事的なことを自由に語っているということが挙げられていた。一方で、短歌の分析により、散文的な傾向があり、内容も多様で、特定の何かを詠っているわけではないが、詩では語られない、悲しく寂しい叙情的な部分を表現していることがわかった。それらの違いが生まれた理由として、小熊にとっては自由にしゃべり捲くことが最も重要であったことが挙げられる。そして、短歌が小熊の創作活動で先に扱われたのにも関わらず、歌人として定着しなかったのは、短歌の31文字の形式と、小熊の語りたいたいという考えとが適合しなかったためだと考えられる。そのため、詩は、叙事的な作品が小熊の人生で継続的に創作して発表されている。一方で短歌は、家族や小熊の故郷である北海道に対する叙情というきっかけがなければ詠むことはなく、短歌に自分の自由な気持ちを詠えないことや表現の技巧の低さからの抵抗により、小熊自身も、短歌を発表してこなかった。また、小熊の短歌の技術の未熟さもさることながら、創作者である小熊自身の創作活動における短歌への意識の低さが、小熊の短歌が今日まで研究されてこなかった理由の一つと言えるだろう。

また、小熊の短歌において啄木の短歌の参考歌、いわゆる本歌取りがあるかどうかや、小熊と同年代の歌人の短歌を比較するまでは至らなかった。小熊の短歌の特徴をより明確にするため、他人の短歌の特徴を比較することは、今後の課題である。

（指導教員 綿拔豊昭）